

¡Feliz cumpleaños! お誕生日おめでとう!

«Olé» 22 de enero/janeiro, 2011

うた：峰 万里恵

ヴァイオリン：喜多 直毅 コントラバス：齋藤 徹 ギター：高場 将美

I

1. ラス・マニャニータス *Las mañanitas*

メキシコ伝承曲 Tradicional mexicano

題名は「小さな（愛らしい）朝」というような意味ですが、メキシコではひとつの音楽形式名で、元来は祭りの日の朝にうたう挨拶の歌、恋人ほか愛する人や尊敬する人にささげる曲のことです。つまりセレナータ（元来は夜のしらべ）の早朝ヴァージョンなわけですが、いつのころからか、誕生日を祝う形式になり、そのパーティが開かれる夜に歌われることのほうが多いようです。いくつか定番の曲があり、またある地方独自のマニャニータスもありますが、ここでとどけするのが、いちばん広く親しまれているスタイルの曲構成です。

このマニャニータスは、ダヴィデ王がうたっていた曲。きれいな女の子たちに、それをわたしたちが、ここでうたいます。

街角の夜番が、わたしにいいことをしてくれればいいな。彼のランプを消してくれればいい、わたしの愛するひとが通るあいだ。

目を覚ませ、わたしのいい人、目を覚ませ。見て、もう夜が明けました。もう小鳥たちがうたっている。そして月はもう隠れた。

なんと美しい朝だろう。わたしがあなたに挨拶しに来た朝。わたしたちはみんな気持ちよく、よろこびをもって、あなたをお祝いに来ました。

あなたの生まれた日には、すべての花たちが生まれた。そして洗礼の水盤では、ナイチンゲールたちがうたっていた。

もう夜が明けてくる。もう朝の光がわたしたちに当たった。朝に起きなさい。見て、もう夜が明けました。

わたしはちっちゃな太陽になりたい、あなたの窓から入るため。そして朝の挨拶をしたい、ベッドに横になっているあなたに。

ジャスミンやほかの花たちを持って、きょうわたしは、あなたに挨拶に来ました。きょうはあなたの誕生日だから、わたしたちはあなたにうたいに来ました。

2. クリオジータ・サンティアゲーニャ *Criollita santiagueña*

アルゼンチン フォルクローレ 作詞：アタウワルパ・ユパンキ Atahualpa Yupanqui

作曲：アンドレース・チャサレータ Andrés Chazarreta

タイトルを訳せば「サンティアゴの土地っ子女性」。サンティアゴは、アルゼンチン北西部にあり、少数のスペイン人と多数の先住民（インカ帝国からやってきた）とが400年ほど前に移住してきて開発し、独自の文化をもった州です。この曲は、フォルクローレ研究家でギタリストで（本職は公務員だった）、後には民俗芸能団を率いて大きな普及活動をした巨匠チャサレータが作曲あるいは採譜編曲したもので、形式は《サンバ》、スカーフを振りながら男女カップルで踊る、求愛のダンスです。1916年に楽譜出版されました。歌詞は、ずっと後年になって、大地の音楽を創作した、南アメリカ最大の巨匠（作詞・作曲家・ギタリスト・歌手・文筆家）ユパンキが付けました。

サンティアゴの土地っ子女性、褐色の肌のきれいな娘。おまえのおかげで空気はいっぱいになる、サンティアゴの恋歌のしらべで。

わたしの土地のいなか娘、黒いまつげ。サンティアゴの朝に咲く、おまえは林の花。

おまえが貯水池から水を運んでくるとき、昼寝の時間が、おまえの歌声で甘くなる。

サンティアゴの土地娘、編んだ黒髪。おまえゆえに男たちはうたう、サンティアゴの恋歌ビイダリータを。

ほかの人たちは、街のしゃれた女性をほめそやすだろう。でも、野のかわいいむすめ、わたしは おまえの午後にうたいたい、この おまえの目のように素敵なサンバを。

3. ロマンズ Romance

ポルトガル、ファド 作詞：アフォンソ・ロペシュ・ヴィエイラ Afonso Lopes Vieira
作曲：カルロシュ・ゴンサウヴシュ Carlos Gonçalves

タイトルは中世からイベリア半島に伝わる物語り詩のスタイルを指します。疲れ果てた自分の魂が帰ってくるというこの物語り詩を書いたロペシュ・ヴィエイラ（1878—1946）は、多方面で活動した文学者です。作曲者は、長い間アマリア・ロドリゲシュさんの最良の協力者だったギターラ（ポルトガル・ギター）奏者です。

真夜中すぎに truz, truz...わたしの扉をたたくものがいた。どこから来たのだ？ おおわたしの魂。「わたしは死んで、ほとんど死んで、やってきました」

もうわたしには、ほとんど、彼女がわたしの魂だとわからなかったほど、変わり果ててやってきた。どこもすっかり裂けていた、彼女の、つばめの2枚の翼。

わたしは彼女に夕食を用意させた、そこにあったいちばんおいしい食べもので。

どこから来たのだ？ おおわたしの魂。もうわたしにはほとんど彼女だとわからなかったほど。

でも、もの言わぬわたしの魂は、見つめるだけで、なにも答えなかった。そして彼女の美しい両目には、どれほど多くの悲しみがあつたことか！

わたしは彼女にベッドを用意させた、わたしのもっていたいちばん良い着るもので——上には赤いダマスカス織りの絹、下にはこまやかな麻。

眠れ、眠れ、おおわたしの魂。おまえを眠りにつかせるために、わたしの口がひとりで、うたっている、泣き出したい気持ちとともに。

わたしの口が、ひとりでうたっている、泣き出したい気持ちとともに。

4. ティグリート (小さな虎) Tigrito 作曲：高場 将美 Masami Takaba

エル・ピンターオ (赤猫) El Pintao

アルゼンチン、フォルクローレ 作曲：ディーアス兄弟 Hermanos Díaz

ディーアス兄弟は、サンティアゴ州のサラビーナ町で一生をおくった（一般的には無名の）バンドネオンとギター奏者で、この土地に生まれ伝わってきた民俗音楽をもとにして、数々の曲をつくりました。それらを、ユパンキをはじめとするプロのアーティストたちが彼らから学んで（聞き覚えて）広く紹介しました。どの曲も、短いなかに、民衆の天才のきらめきがあつて、魅力いっぱいです。「赤猫」は、ガト（猫のこと）という名前のダンス形式です。ガトは、アルゼンチン全国で愛好されてきた快活なテンポのダンスで、昔、猫を歌った歌詞が有名だったので、この名が付きましました。振り付けは猫の真似をするわけではなく、男女カップルで、指を鳴らしながら、求愛の気分です踊ります。

5. ラ・オルビダーダ (忘れられていたチャカレーラ) La Olvidada

アルゼンチン、フォルクローレ 作詞：アタウワルパ・ユパンキ Atahualpa Yupanqui
作曲：ディーアス兄弟 Hermanos Díaz

ディーアス兄弟が弾いていた曲に、ユパンキが作詞し、みずからギターを弾きながらうたって有名になりました。日本では『忘却のチャカレーラ』という題になっていましたが、ちょっと内容からズレるようです。荒れ野の道ばたに忘れられていたチャカレーラをディーアス兄弟が拾ってきたのです。

わたしは見つけた このチャカレーラ、砂地で 苦しんでいた、バランカの土地っ子男に置き去られて——彼はもうフーミの繁みを見ることはないだろう。

このように ある土地っ子がうたっていた。サラビーナの土地っ子が、アルガローボの木の下で、とある1月（真夏）の昼下がり。

もう行くよ もうわたしは行くところだ、チルカ・フリーーナ町の方角へ。アイ命のひと だれにもわからない、わたしに明日 何が起きるか。

おれのいとしい人は おれを置いて行ってしまった チルカ・フリーーナのほうへ。持って行ってしまった、馬と荷馬車、あのボンボ（太鼓）と あのダマフワーナ（アルガローボから作る酒などを入れる大きなかめ）。

わたしはちょっとした木になりたい、とても大きくはなく とても小さくもない木に。ほんの少しの影をあげたい、道に疲れた人たちに。

* フーミ＝塩の原に生える灌木。石けんの材料になるそうです。

* アルガローボ＝アルゼンチン北西部各地で非常に親しまれているマメ科ネムリグサ属（ミモザの仲間）の木。さやに入った豆が生る。地中海沿岸の原産。日本名イナゴマメ。



● チャカレーラの踊り。
右方にある白(うす)で豆をつぶし、発酵してできた酒を、左のダマフワーナに入れる。

もう行くよ、もうわたしは行くところだ。アスパ
・スーマ村、サラビーナ町、たぶん もう決して帰っ
てこないだろう、おまえの塩の原をながめに。

バランカ、愛する土地、おまえにこのチャカレー
ラを置いていく。
命のひと 忘れてはいけない、野の奥に向かって行っ
てしまう者を。

6. ラ・ポメーニヤ (ラ・ポーマの歌い女)

La Pomeña

アルゼンチン、フォルクローレ 作詞：マヌエル・J・カスティージャ Manuel J. Castilla
作曲：クチ・レギサモン Gustavo "Cuchi" Leguizamón

ラ・ポーマは、アルゼンチン北西部、サルタ州のアンデス山系にある小さな町
(人口 1000 人、標高 3000m)。サルタ市に住む詩人と作曲家・ピアニスト
(本職は弁護士) がカーニバルのときにここを訪れ、ビダーラ (山岳・高原地帯の
民俗歌曲形式) をうたう土地の女性に感動して、この曲をつくりました。

この曲が有名になったので、彼女はその後ときどきラ・ポーマ村を出て、
より大きな町の民俗音楽フェスティバルに出演することもありました。
いまでも健在のようです。(右写真が本物のエウローヒア・タピアさん。羊を見張る
——他人に雇われて——のが、唯一の収入源です)



エウローヒア・タピアは、ラ・ポーマで 空気に
彼女のやさしさを与える——彼女が砂の上を通ると
き、月を踏んでゆくとき。

彼女が刈ってゆく小麦は、彼女の胸で熟す。アル
ファルファの花を見ながら、彼女の黒い両目は青く
なる。

カーニバルの遊びで粉をかけられて、彼女の顔は
真っ白になる。彼女の影は砂まみれになる。うたい

ながら、歌の魔法を解きながら、彼女の悩みたちは
闘い合う。

彼女は、白い馬に乗ってやってくる。彼女の両手
の中でカーハ (小太鼓) がふるえる。夜の中に沈ん
でゆくとき、彼女は褐色の肌のダリアの花。

おまえの家の柳の木は、泣いている。なぜなら人々
がおまえを盗んでいくから——カーニバルのために、
彼女がなくてはならないから。

7. フィーナ・エスタンパ (優美な姿)

Fina estampa

ペルー、ワルツ 作詞作曲：チャブーカ・グランダ Chabuca Granda

ペルーの首都リマでは、ワルツに、スペインの古い感性に、アフリカのリズムと先住民の哀愁が一体となって、独自のスタイルが生まれました。ワルツは、リマのアイデンティティといえる音楽です。この曲は、ペルーのワルツに、より深く広い世界を創造した女性チャブーカさんの代表作のひとつ。彼女の亡き父のためにつくられた曲ですが、恋する男性への賛歌ともとれます。

楽しげな せまい通り道。月の光か太陽の光を
浴びて、ベルトのように伸びている。両側には朝
焼け夕焼け。ゼラニウムの朝焼けと、恥じらいを
もったほほえみ。カーネーションの夕焼けと、花
ひらく両ほほ。

マグノリアに薫り、夜明けに露をやどして、せ
まい通り道はほほえむ、あなたの足に愛撫されて。

ククリー鳩は笑い、窓は身をふるわせる。その
通り道を、あなたの優美な姿がそぞろ歩くとき。

歩道はあなたを運んでゆく、家々の軒先へ向か
って。そして魔法にかけられた中庭へ、あなたを
運んでゆく。小さな広場へ向かって、そして夢見
た愛のところへ。

せまい通り道は子守歌にする——刺しゅうした

タフタのドレスのきぬずれの音、絹のブーツのヒ
ールの靴音、そして糊のきいたペチコートのスレ
る音。

それは楽しげな小道、月か太陽の光を浴びて。
そこをわたしはうたって歩きまわろう、あなたを
つかまえられるかもしれないから。

優美な姿の紳士、あなたをじっと待っていていられ
る人なんかいない。

優美な姿の紳士、おしゃれな姿の紳士。明星が
降りてきて、帽子の下でほほえんだとしても、あ
なたのように美しくほほえむことはなく、あなた
の目の輝きに負けるだろう。

紳士、あなたの歩みは輝かせる、歩んでゆく
歩道を。

II

1. 酔いどれたち *Los mareados*

アルゼンチン、タンゴ 作曲：フワン・カルロス・コビアン Juan Carlos Cobián

歌なしの演奏でおとどけします。1922年に、キャバレーの世界での若者の恋愛をえがいた芝居の主題歌としてつくられました。悩みゆえに麻薬におぼれる女性にうたいかける歌詞でした。作曲者はピアニストで、この時期もっとも音楽性の高い楽団指揮者でした。

2. ラ・ブルーハ（魔女） *La Bruja*

メキシコ、ペラクルース地方伝承曲 *Tradicional veracruzano*

映画『フリーダ』で、主演女優がうたっていました。女性画家フリーダ・カーロがとても好きだった曲だそうです。今日では、わりあいゆっくりしたワルツ・テンポにして、メキシコ民俗舞踊・フォークダンスの人気曲のひとつになっています。真っ白なドレスの女性たちによる群舞の振り付けが一般的で、怪しい歌詞ですが、少女たちも踊ります。

アイ 朝の2時に飛ぶのは、なんてすてき。飛んで自然に落ちこちる、ご婦人の両腕の中へ。アイ 飛ぶのは なんてすてき、朝の2時に、アイ ママ！

わたしを魔女がつかまえる。彼女の家へ連れてゆく、わたしを植木鉢に変える、そしてズッキーニに。

わたしを魔女がつかまえる。わたしをお部屋へ連れてゆく。彼女の両足の上ですわらせて、わたしにキスを食べさせてくれる。

アイ 教えて、教えて、教えてくださいませ、魔女さん。何人の赤ん坊を、きのう吸い取ったんですか？
ひとりも、ひとりも……わたしにはわかりません。

わたしがやりたいと思っているのは、あなたを吸い取ってしまうこと。

アイ ひとりの女がわたしを驚かせた、塩辛い海の真ん中で。ほかの人たちが わたしに話してくれたことを、わたしはこれまで信じようとしなかった。なんと！ 上のほうは女性、下のほうは魚。アイ ママ！

起きなさい ペトラ、起きなさい フワナ。そのへんを魔女が歩きまわってるよ、ベッドの下を。

起きなさい アルセーリア、起きなさい アベラール。そのへんを魔女が歩きまわってるよ、あんたのおばあさんの後ろから。

3. ヴァイオリンのチャカレーラ *Chacarera del violín*

アルゼンチン、フォルクローレ 作詞：ハビエール・シピオーロ Javier Zipiolo 作曲：シモン兄弟 Hermanos Simón

シモン家の5人きょうだい（バンドネオン、ギター2、ボンボ、女性歌手）は、サンティアゴ出身で、1930～60年代、フォルクローレのダンス・パーティやラジオ放送で、この地方に根ざして活動しました。

遠くで、とあるチャカレーラに乗って鳴っているヴァイオリン。風といっしょに悲しく嘆いている、カクイ・トゥライの哀歌のように。

どこから来たのだ あの老人は？ スーパイ（悪魔）そのものにちがいない。人のいうには、目が見えなくなったのだそうだ、テレシータのことを泣きすぎて。

マノガスタの道。スマンパの、マイリーンの道。ひとびとは彼が泣きながら通るのを見た。哀れな盲人、ヴァイオリンを弾きながら。

朝が近づいてくる。そして盲人はもう行ってしまふ。テレシータは死んでしまった、あんまり、あんまり踊って、踊ったので。

もう鳥たちはうたわない。そしてすべては沈黙の中にある。たぶん鳥たちはまた来るのだろう、来年カーニバルが帰ってきたら。

そして盲人は彼のヴァイオリンをもって、道を通ってやってくるだろう。テレシータが踊るために、このチャカレーラを弾きながら。

テレシータはじぶんを燃やしている。止まることなく踊っている。哀れなむすめよ、踊るがいい。いつも彼女ゆえにヴァイオリンが泣くだろう。

*カクイ・トゥライ＝鳥の名前。夜「カクーイ、トゥライ、トゥライ」と劇的に悲しく鳴く。これはキチュア語（インカ帝国の言語のサンティアゴ方言）で「わたしの男の子、わたしの弟よ」という意味。親切な弟につらく当たってばかりいたので、復讐されて、木の上に取り残された若い女性の化身といわれる。

*スーパイ＝インカ帝国の文化圏に広く信じられてきた大地の精霊。カトリックの「悪魔」とだいたい同じだが、人を助けることもある。ボリビアあたりでは、鉱山の守護神として偶像がまつられるが、サンティアゴでは形がなく、さまざまな人間の姿に化ける。

*テレシータ＝伝説上の（実在したらしい。本名テレーズ・オラ・カスティージョ）、サンティアゴの森にひとりで住んでいた女性。村でダンスのパーティがあると、音を聞きつけてやってきて、外でいつまでも楽しげに踊っていた。ある夜、彼女が来ないので不審に思った村人が翌日探したところ、燃え尽きた焚き火のそばで焼け死んでいた。音楽の音が聞こえて、喜んで夢中で踊りだして、スカートに火が付いてしまったのだろうと推測されている。今日では幸運を授けてくれる、カトリックの聖女なみのあつかいで、絵姿などに供え物がされる。

4. ???

齋藤 徹、喜多 直毅のコーナーです。
そのときまで、何が演奏されるかわかりません。

5. かもめ *Gaivota*

ポルトガル、ファド 詩：アレシヤンドル・オネイル Alexandre O'Neill 作曲：アラン・ウルマン Alain Oulman
ポルトガルの現代詩を代表するひとりの作品です。作曲者は、フランス人でリスボン郊外で生まれ育ち、伝統精神をまったく失わない新しいファドのメロディを、女性歌手アマーリア・ロドリゲシュさんのために創作しました。

もしも1羽のかもめが、わたしにリスボンの空を描いてもってきてくれたら、どんなにすばらしいことだろう。今、そこに見えている空では、まなぎしは飛ばない翼。力をなくして 海に落ちてゆく。

どんなに完璧な心臓が、わたしの胸の中で脈打つことだろう。わたしの愛よ、あなたの手の中で。その手の中には、かつて わたしの心臓が完璧におさまることができた。

もしも とあるポルトガルの船乗り、7つの海をさすらってきた男が——そんなことがあるかも——彼の発明したことをわたしに語ってくれる最初の人になったとしたら。もしも新しい輝きをもった とあるまなぎしが、わたしのまなぎしに結びついたとしたら。

どんなに完璧な心臓が、わたしの胸の中で脈打つことだろう。わたしの愛よ あなたの手の中で。その手の中には、かつて わたしの心臓が完璧におさまることができていた。

もしも 人生にさようならを言うとき、空の鳥たちのすべてが、あなたの最後のまなぎしを、お別れにわたしにくれたとしたら。——ただあなただけのものだった そのまなぎし。愛する人よ 最初の人だったあなた。

どんなに完璧な心臓が、わたしの胸の中で死んでゆくことだろう。わたしの愛よ あなたの手の中で。その手の中で、かつて わたしの心臓が完璧に脈打っていた。

6. 黒い鳩 *Paloma negra*

メキシコ、ランチェーラ 作詞作曲：トマス・メンデス Tomás Méndez
作者は、一般的イメージをくつがえす、情熱のドラマを生きる鳩を登場させました。『ククルククー・パローマ』では、女性に去られて悲しみ死んだ男の号泣が鳩の鳴き声になったといえます。この曲では……

もうわたしは泣くのに疲れた。そして夜は明けない。もうあなたを呪ったらいいか、それとも、あなたのために祈るのかわからない。

わたしは、あなたを探しに行き、見つけるのが怖い。わたしの友人たちが、あなたが行っていると確信しているところへ。

時にはわたしは、自分をこわしてしまいたくなる。もうここで、わたしの牢屋の釘を抜くために。でもわたしの両目は、あなたの両目を見ないと死んでしまう。そしてわたしの愛情は、暁の光とともに、ふたたびあなたを待っている。

もうあなたは自分からパランダ（酒宴）の道に走っ

てしまった。黒い鳩、黒い鳩、どこに、どこにいる？

もうわたしの名誉をおもちゃにしないで。だって、あなたの愛情は、わたしのものでなければならぬ、ほかのだれのものでもなく。

そしてわたしはあなたを愛して狂っているけれど、もう、もう帰ってこないで。黒い鳩、あなたは牢屋の鉄格子。

わたしは自由になりたい。わたし自身の人生を生きたい、わたしを愛してくれる人と。

神よ わたしに力をください！ わたしは死んでゆく、その人を探そうとして。

もうあなたは自分から、パランダの道に走ってしまった！

ごいっしょに時間をすごしていただき
ありがとうございました。

またお会いするのを
楽しみにしております。
今後どうぞよろしく。

構成：峰 万里恵
プログラム作成：高場 将美

◆ホームページ：<http://mariemine.web.fc2.com/>

◆メール：marie-mine@hotmail.co.jp